

招瑞娟の歩みと神戸華僑が紡いだ日中版画交流史—2023年度新規収蔵作品から

町村 悠香

はじめに

当館では2023年度に招瑞娟(ZHAO Ruijuan 1924-2020)の作品26点と夫の詹永年(ZHAN Yongnian 1926-)の作品1点の寄贈を受け入れた。招瑞娟は神戸を拠点に版画家として活動した華僑の女性である。筆者が招に関心をもったのは「彫刻刀が刻む戦後日本—2つの民衆版画運動」展(2022年4月-7月)の調査がきっかけだった。この展覧会では魯迅が提唱した中国の木刻運動の影響で、戦後版画運動と教育版画運動という2つの民衆版画運動が展開したことを紹介した。展覧会1章では神戸華僑が戦後の中国木刻普及の一翼を担ったことを示した。招瑞娟は中心にいた李平凡(LI Pingfang 1922-2011)と神戸中華同文学校の同僚だった。招は李平凡の影響で木版画を始め、1950年に李が帰国した後も日本で版画制作を続け、特に社会的なテーマを追求した。

招の作品を初めてまとまって鑑賞できたのは「神戸華僑女流版画家 招瑞娟遺作展」(主催・会場:神戸華僑歴史博物館、詹永年協賛、2022年1月-2月)だった。「彫刻刀が刻む戦後日本」展の開催直前だったため、展示には当館収蔵品以外は招瑞娟の作品を組み込めなかった。その後、詹永年氏から寄贈申出をいただき収蔵にいった¹。

日本に限らずアジア各地へ木刻が伝播した際に、華僑のネットワークやコミュニティが大きな役割を果たした²。日中を跨いでトランスナショナルに活動した李平凡と、神戸の華僑コミュニティに属した招瑞娟の活動は、日本における木刻の広がりを東アジア的視点から見ると一助となる。また、戦後の多くの美術運動と同様に戦後の民衆版画運動も男性が主体で女性はマイノリティだったため、招はこの運動に関わった数少ない女性作家の一人だった³。

こうした立ち位置にあった招瑞娟の活動に着目することで、これまでにない視点から戦後の版画史を考察できる意義があると考え、本稿でその経歴を記す。招の画業は『招瑞娟版画集』(監修:高橋亨、構成・発行:詹永年、1984年)にまとまっている。経歴は画集をもとに関連文献⁴や詹氏へのインタビューを参考に補足し、今回収蔵した作品にも言及する。

木刻との出会い

招瑞娟は1924年に貿易商の父のもとに、8人姉妹の長女として広東省に生まれた⁵。1927年、3歳の時に父の事業のため来日、1930年に神戸華僑同文学校小学部に入学し、1936年に初等中学に進学した。1937年の盧溝橋事件で、日中は本格的な交戦状態となった。華僑の多くが帰国し教員が不足したため、神戸華僑同文学校は休校した。そのため、1939年にキリスト教系の頌栄保育選考学校に入学し幼児教育を学んだ。招にとって初めて日本語で教育を受ける機会となり、この頃から絵に興味を持ち始めた。1941年に卒業後、神戸中華同文学校附属幼稚園に教員として就職した⁶。

1940年代初頭に天津出身の李平凡が来日した⁷。李平凡は木刻運動の影響を受け、版画制作をしていた。神戸中華同文学校で美術を教えはじめると、神戸新集体版画協会を結成し木刻を普及した。招も協会に加わり版画を制作し始めた。

李平凡、招瑞娟、藍蔚邦は1943年11月に版画集『浮萍集 木刻版画』(【図1】当館蔵・小野忠重旧蔵)を制作した。「浮萍」は浮き草を意味し、戦争中の不安定な状況下で招瑞娟の叔父・藍蔚邦が帰国することになり、記念に版画集を作ったと後書きにある⁸。

戦時中は華僑に対して特高警察の監視があった。木刻を普及する李平凡は左派的であると当局に厳しくマークされ、行動を制限され、『浮萍集』の多くは押収された。当館の小野忠重コレクションにある一冊は、押収前に小野に送られたと思われる貴重な作品である。この版画集に収まっている招の作品は、線を主体とする中国木刻のスタイルから強く影響を受けている。人物の息と工場の煙突から出る煙の刻線が交じり合い、象徴的な模様をかたちづくっている。

終戦と東京美術学校入学

1945年6月5日の空襲で神戸中心部はほぼ焼失した。神戸中華同文学校など華僑関係の施設も失われ、招も含め多くが自宅から焼け出された。学校は1946年6月に復興の目処が立

ち、9月から授業が再開した。授業は焼失を免れた兵庫区の大開小学校の校舎を間借りして開き、学校関係者は学校に住む者も多かった⁹。

1946年にはGHQの戦後の制度改革により、女性も東京美術学校に入学できるようになった。詹永年と招瑞娟の父親たちは神戸中華同文学校の経営に携わっており、学校再建を進めていた只中であって、2人は家族の反対を押し切って上京した。同年5月15日に東京美術学校油画科に「特別学生」という留学生枠で入学している¹⁰。当初は版画を学びたいと思い入学したが、版画科がなかったため油画科に入った。安井曾太郎教室に所属し裕伊之助にデッサンを学んだ。

木刻普及との関わり、3足の草鞋を履いて

李平凡は神戸で1945年9月に日本華僑新集体版画協会を結成し、木刻普及を再開した。1947年2月に協会が神戸で中国木刻展を開き、同時期に東京でも中日文化研究所を中心に木刻を紹介する動きが起こる。

日中版画交流が盛り上がるなか、1947年7月16日に「日中版画懇親会」が東京で開催された。戦後日本で初めて開催されたとされる日中の版画家の交流会で、当時美術出版社に勤めていた小野忠重が呼びかけ、同社で開催された。招はこの会にほぼ唯一の女性として参加した。

招と詹は1948年に結婚。その後娘が誕生し、教員不足から両親に呼び戻され、1948年か遅くとも1951年には神戸に戻り、以後は晩年まで神戸に住んだ¹¹。1952年に多くの画家が湊川神社の拝殿天井絵を献納した際に招も参加した。この時

棟方志功も献納に加わり、その縁で日本版画院に所属した。

招は神戸に戻った後は神戸中華同文学校の美術教員を務め、教職、母親、そして版画家という3足の草鞋をはく生活を送った。教え子によると授業で制作した版画は『三国志』など、歴史教育と結びついたテーマもあったという¹²。大田耕士が主導した日本教育版画協会に所属し、機関誌『はんが』No.65(1958年11月)には、招が指導した生徒の作品が表紙に掲載されている。

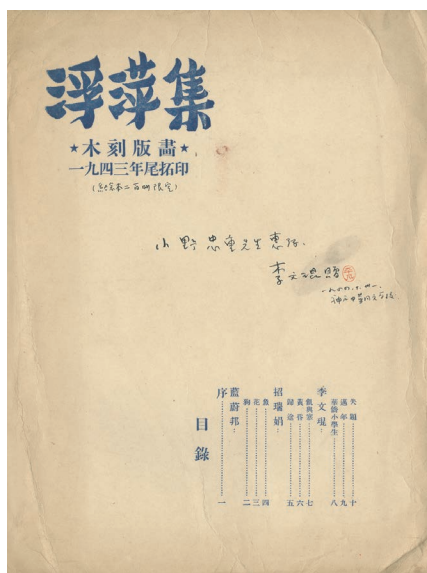
第五福竜丸事件と女性による平和運動

招が社会的なテーマで制作するようになったのは、第五福竜丸事件がきっかけだった。1954年3月にアメリカが太平洋ビキニ環礁沖で水爆実験を行なった際、マグロ漁船・第五福竜丸が知らずに付近を航行していた。多くの乗組員が被曝し、1人が亡くなると、放射能の危険性が広く報道され、核兵器廃絶を求める「原水爆禁止署名」の運動が起こった。

放射能で汚染された積荷のマグロの処分問題が連日ニュースになり、原水爆は食に関わる生活に身近な問題だと捉えられた。そのため杉並区の公民館で学習をしていた主婦グループが署名活動の発起人となり、全国に広がった。平和運動に女性が積極的に参加し始め、女性作家が反戦をテーマに描くことを促した。招瑞娟もその一人で、反戦や公害問題など社会的なテーマを追求した作品を発表していく。神戸大空襲という辛い戦争体験を抱えていたことは反戦への思いを一層強くした。

招に大きな影響を与えた芸術家は、ケーテ・コルヴィッツと丸木位里・俊(赤松俊子)夫妻だった。彼女たちの作品を知ったきっかけは、帰国した李平凡が中国から送った画集だったという。1958年頃にコルヴィッツの版画集を、また同じ頃に李平凡が編集・発行した『日本画家丸木位里・赤松俊子作品選集』(人民美術出版社、1959年)を手にし、終生にわたって影響を受けた¹³。

直接交流をもったのは版画家の上野誠で、上野から木版画技法の指導を受けた。上野は



左：【図1-1】編集・発行：李文琨(李平凡)『浮萍集 木刻版画』1943年表紙 27.4×21.3cm

右：【図1-2】『浮萍集 木刻版画』より招瑞娟《黄昏》

中国木刻に強い関心を抱き、戦後版画運動に参加していた。上野誠と大田耕士の勧めで、1959年からは日本板画院でなく日本版画協会に出品し始め、1962年に会員となる。特に上野誠は招が日本版画協会に活動するうえで後ろ盾となった¹⁴。

反戦と公害を訴えて

第28回日本版画協会展に出品した《求む》(【図2】1960年、新規収蔵作品)は、海のなかから突き出た無数の手が描かれている。身を寄せ合うように重ねられた手のボリュームと、背景で吹き荒ぶ風の激しさは線の集積で表されている。モノクロの線によって立体感や心象風景を伝えるのは、この時期の彼女のスタイルの特徴だ。白黒の世界のなかに批判精神を込めた象徴的イメージを展開した。

本作にも見られるように、招の作品には太陽がよく描かれている。これは原子力の象徴だという¹⁵。ここから連想すると、海から伸びた手は水爆実験で生じた水柱に見える。一方で、この手はケーテ・コルヴィッツが《種を粉に挽いてはならない》(1941年)で描いた身を寄せ合う母子をも想起させる。



【図2】招瑞娟《求む》1960年 38×64cm



【図3】招瑞娟《PCB油症患者(1)》1973年 36×60cm



【図4】招瑞娟《ヒソミルクの中毒患者》1978年 56×45cm

《種を粉に挽いてはならない》には、子どもを戦場に送らせまいと両腕を回して子を守る母親の手が逞しく描かれているからだ。本作を含む2点が評価され、日本版画協会展新人賞を受賞した。

招はその後、公害問題、特に食品公害事件も主題にしていく。前述の通り原水爆反対署名が女性の関心を集めたのは、食の安全に関わる問題でもあったからだった。招は第五福竜丸事件の頃は幼い子どもを育てており、食の問題は切実な関心事だったと思われる。

《PCB油症患者(1)》(【図3】1973年、新規収蔵作品)は「カネミ油症事件」がテーマだ。この事件はカネミ倉庫の食用油にダイオキシン類のPCBが混入した食品公害事件である。西日本を中心に約1.4万人が健康被害を訴えた。1968年頃から患者が出始め、1970年代に関係会社に対する裁判が起こった。本作で表された黒い爪や皮膚は、被害者の症状と苦しみを象徴的に表している。

《ヒソミルクの中毒患者》(【図4】1978年、新規収蔵作品)では「森永ヒ素ミルク中毒事件」の被害を受けた子どもを描いた。この事件では森永乳業の粉ミルクにヒ素が混入し、1955年頃から患者や死者が出始めた。会社が因果関係を認めしたのは1970年になってからで、不買運動も起こり、消費者の権利を確立するうえで重要な事件となった。

本作について招は「ヒソミルクの中毒患者も、これは人命軽視の社会問題ではないでしょうか。おそらく、いまのみなさんが忘れてしまっても、中毒にかかった子どもたちは、一生苦しむことでしょう。(中略)暗い部屋の中で、いつもただ一人すわって、クレヨンを手になぐりがきしかできない。この少女を毎日毎日見守っている母の胸の痛みをだれが知ってくれるのでしょうか。」¹⁶と記している。

こうした反戦や公害をテーマにした作品には、民族の壁を超えたヒューマンリズムの精神が込められている。科学の発展が人類に害をもたらす近現代社会の矛盾に考えを巡らせ、弱者を見捨てる人命軽視の風潮が戦争に繋がると考えた。中国木刻のリアリズムを

受け継ぎながら、日本社会の一員として同時代的な問題に関心を持ち制作を続けたのである。なお本稿では招瑞娟に着目する理由として彼女の属性を挙げたが、彼女固有のアイデンティティーと作品の表現については、より深い考察が必要である。

1980年代の日中交流復活と中国での個展

前述の通り、1940年代後半は日中版画交流が盛んに行われていたが、1950年代後半からは中国国内の政治闘争である反右派闘争などの影響から交流が途絶えていく。さらに1966年からの文化大革命の最中、李平凡は日本のスパイを疑われ僻地での労働改造を経験した。版画を通じた両国の交流が回復するのは1972年の国交回復、1976年の文化大革命終了を待たねばならなかった。

1970年代末からは李平凡も度々来日できるようになり、1980年代から日中版画交流が復活していく。その盛り上がりのなかで、1983年には「招瑞娟版画作品展」(主催：中国美術家協会、北京・中国美術館)が開催され、招の作品が中国で初めて紹介された。両国の交流が中断していた間に、魯迅の精神を日本において開花させた招の作品は、中国でも驚きと称賛をもって受け止められたという。

日中版画交流の歴史を紡ぐ

以上、招瑞娟の歩みと作品について述べてきたが、今回受け入れた招の作品は当館コレクションのなかでいかに活用できるだろうか。当館では浮世絵に影響を与えた近世中国版画を所蔵し、日本の版画史を日中交流の観点からも捉えてきた。また1987年の開館以来、中国版画を紹介する展覧会を度々開催した。なかでも李平凡も協力して1988年に開催した「中国版画2000年」展(第1部「中国現代版画展」、第2部「中国児童版画展」、第3部「中国古代版画展」)は、1980年代に再興した日中版画交流の一つに位置付けられる。当館のこれまでの活動を踏まえて招瑞娟の作品を紹介することで、コレクションを通じて紡ぐ日中版画交流史の奥行きを広げられると考えている。

註

1 招瑞娟作品は実践女子大学香雪記念資料館と兵庫県立美術館にも収蔵された。

- 2 「闇に刻む光 アジアの木版画運動」展(福岡アジア美術館・アーツ前橋、2018-19年)では、木刻運動が中国大陸だけでなく日本、台湾、シンガポールといった東アジア・東南アジア各地に広がり、背景に中国人・華僑のネットワークがあったことを紹介した。
- 3 明治美術学会 2022年度第3回例会(2022年9月)発表では、展覧会で紹介できた2人の女性作家に注目した。概要は町村悠香〈研究発表要約〉展覧会報告「彫刻刀が刻む戦後日本 2つの民衆版画運動」展・研究発表「2つの民衆版画運動と女性作家、エスニック・マイノリティー-小林喜巳子、招瑞娟の関わりから」『近代画説』32号(明治美術学会、2023年12月、pp.176-177)を参照。
- 4 招瑞娟に言及している文献は以下の通り。李平凡著、中国人民政治协商会议北京市委员会文史资料委员会編『版画滄桑 李平凡版画60年回忆录』(北京出版社、1997年)、李平凡著、李燕・木全恵子訳『版画滄桑』(白帝社、2006年、*前掲書の翻訳版)、張玉玲「日中版画交流史—李平凡在日期间中の活動を中心に」『中国21』No.28(愛知大学現代中国学会、2007年12月、pp.261-282)、神阪京華僑口述記録研究会編『聞き書き・関西華僑のライフヒストリー第2号』(2009年12月、神戸華僑歴史博物館)、曾士才「戦中・戦後における神戸華僑の体験：華僑学校の教職員の事例」『異文化 論文編』19(法政大学国際文化学部、2018年4月、pp.53-84)
- 5 詹氏がまとめた招瑞娟と詹永年の来歴のメモ(2023年9月受け取り)では、招は1925年に神戸で生まれたと書いており、詹氏は口頭でも繰り返し妻は神戸生まれだと述べていた。ここでは『招瑞娟版画集』の年譜になった。
- 6 広東語で教育する神戸華僑同文学校と北京語で教育する神戸中華公学が合併し、1939年に北京語で教育する神戸中華同文学校が成立した。
- 7 李平凡の来歴と活動の評価は『中国20世紀自伝回想録解題集『野草』増刊号』(中国文芸研究会、2022年7月)の解題・李平凡(執筆：藤井得弘、pp.188-189)に端的にまとまっている。第8回横浜トリエンナーレ(2024年3月-6月)では小セクション「李平凡の非凡な活動：版画を通じた日中交流」で李平凡が紹介される。
- 8 招の教え子のインタビュー(2022年2月26日、神戸華僑歴史博物館)では、藍蔚邦は実際は帰国しなかった。
- 9 曾士才「戦中・戦後における神戸華僑の体験／華僑学校の教職員の事例」『異文化 論文編』19、pp.69-76
- 10 財団法人芸術研究振興財団、東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学 百年史 東京美術学校篇第三卷』ぎょうせい、1997年、p.1019
- 11 来歴のメモ(2023年9月受け取り)では東京美術学校で学んだのは2年だったという。吉田千鶴子『近代東アジア美術留学生の研究—東京美術学校留学生史料』(ゆまに書房、2009年)によると、『平成2年(1990) 同窓生名簿』では「昭和23年3月31日に無届長期欠席のため除名。(26年3月修了)」となっている。
- 12 招の教え子のインタビュー(2022年2月26日、神戸華僑歴史博物館)
- 13 『版画滄桑』では丸木夫妻の画集は反右派闘争のあおりで発行直後は中国で公開できなかったとされ、招がどのようにして日本で入手したか検討が必要である。
- 14 萩原秀雄が『招瑞娟版画集』に寄せたテキストから上野の後押しが読み取れる。
- 15 詹永年氏インタビュー(2023年4月9日、詹氏自宅)
- 16 招瑞娟「この子らに平和な明日を」『まなぶ』1985年8月、労働大学出版センター、pp.5-8

町田市立国際版画美術館 紀要 第27号

2024年3月29日 発行

編集・発行 町田市立国際版画美術館
〒194-0013 東京都町田市原町田4-28-1
TEL : 042-726-2771 / 0860

刊行物番号 23-57

製作 ニューカラー写真印刷株式会社

Machida City Museum of Graphic Arts
Haramachida 4-28-1
Machida City, Tokyo, Japan 194-0013

Edited and Published by Machida City Museum of Graphic Arts
Printed by New Color Photographic Printing co., ltd.